

試験地紹介

森林技術・支援センター

大北川溪畔林再生試験について、3回にわたって紹介します。(第2回) 前回は試験地の概要と調査内容、そして取り組みの経過を紹介しました(図1)。今回は、進入してきた広葉樹のうち、更新木(胸高直径5cm以上)の10年間の推移をご紹介します。



スギ植栽木の状況

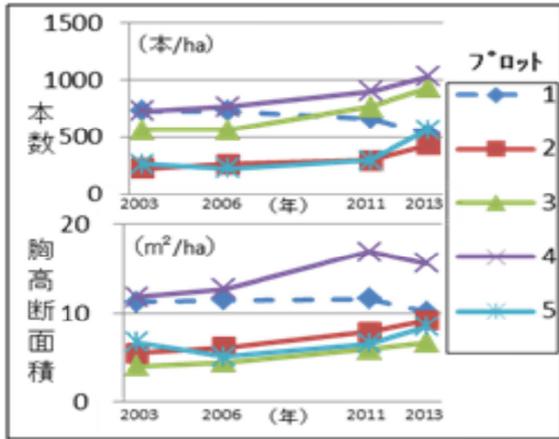
表1

プロット	伐採率 (%) BA比	現状	
		本数 (本/ha)	平均胸高直径(cm)
1	17 低	800	29
2	55 中	400	28
3	72 高	167	34
4	75 //	267	29
5	76 //	233	33

示します。2004年度の間伐実施時に、水際の造林不適地では高い伐

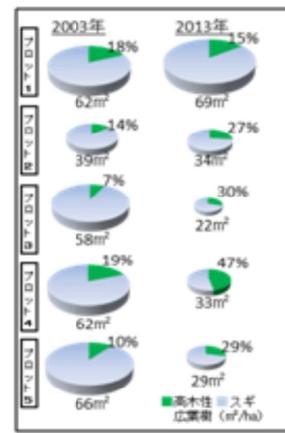
本試験は広葉樹を主体とした溪畔林を目指し、現在その過程であり、先ずは伐採状況を

図3



高木性広葉樹の各指標の推移 進入した高木性広葉樹の本数と胸高断面積の推移を図3で表しました。低い伐採率のプロット1は両項目で減少していますが、それ以外のプロットでは増加しています。

図2



採率となりました(表1)。伐採前と伐採後10年の変化を「胸高断面積(※1)の比率」で表しました(図2)。伐採率によりスギと高木性広葉樹の比率に差が見られます。

対照林分との比較

それでは対照林分に近づいているかを円グラフを使って、高木性広葉樹胸高断面積の比率の推移を見てみましょう。(図4)



対照林分及びその周辺の広葉樹二次林で「生長錘(※2)」による樹齢調査を行ったところ、樹齢は約70〜100年と推定され、周辺スギ林の一代前のスギ林と同時期頃に成立しはじめた林分だと思われま

すが、ここではその他としています。全体としては、全ての高木性広葉樹がヘクタール当たり約8m<sup>2</sup>から10m<sup>2</sup>へと約25%増加していますが、その内、対照林分構成樹種とそれに近い種の比率は、59%から65%に増加しています。量・質ともに対照林分に近づいていることが分かりました。

先駆的で沢沿いに出現するオオバアサガラは(溪畔種としても良いで

用語解説 ※1「胸高断面積」：胸の高さ(地際から120cm)での樹木の幹の面積。 ※2「成長錘」：年輪を読み取るため、中空の金具をドリルで樹木の幹に挿入して木片を採取する器具。

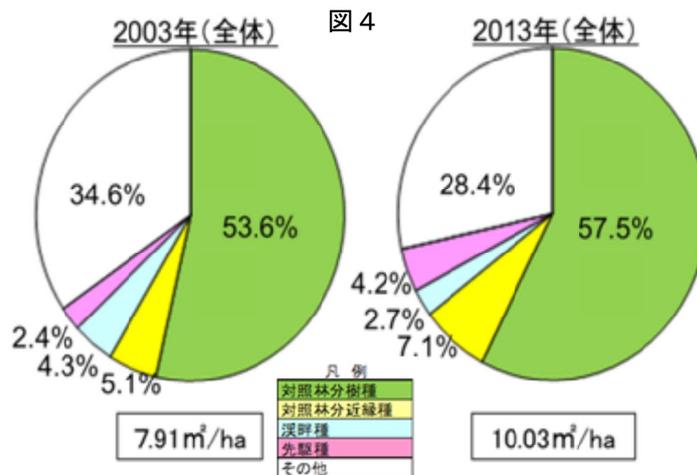


図4